昭和二十年八月九日長崎

伊藤　とし子
新井二丁目

当時私は二一歳でした。あれから五〇年も経過したのに今日までに未だに救護法の制定も見られず、核廃絶のきざし、反省のない口惜しさ、叫び続けた声も枯れ果てるほどに老齢化してしまいました。

歯科医専を卒業して先ず最初に就職したのが長崎の病院だった。ここは爆心地にほど近い場所にあったため、ほとんどの人々は一瞬にして尊い命を奪われた。私は奇跡的にも数少ない生存者の一人になった。

当時の長崎は、空襲警報中の毎日で、一日数回となく、「西部軍管区情報延岡方面よりB29〇〇機編隊来襲」のニュースが流れていた。我々はこの情報にはすっかり馴れ切って、日常茶飯事の行事として慢性的になり、恐怖を通り越した習慣が身についてしまっていた。

ちょうどあの日（八月九日）は珍しく空襲警報が解除され、警戒警報中になった。この時とばかり、防空壕の中で生活している老若男女は、我先にと壕から飛び出して来た。そして早速七輪を持ち出してご飯を炊き出す者、窮屈な洞窟から解放されて姿体を柔軟させる者、存分に手足をのばして発声する者、何度も空を仰いで深呼吸する人々。それは暗黒の世界から光明の世界に踊り出た、生を謳歌している一時の安らぎの一駒であった。

私はちょうどその時、病院の一階の技工室で技工士と患者の製作物の打ち合わせをしている最中だった。午前十一時を少し廻った頃、突然「ピカッ」と電光のような強烈な光をうけた。九ツほどの数を数えただろうか、あたかも万雷が一度に落ちたような大音響を感ずると同時に私は意識を消失してしまった。

数分、或は数時間も経過したのか、それすら定かではないが、ふと気がついた時は、私は大きな梁の下に押し潰されていた。何度もがいても微動だにしない。やっとの思いで這い出したものの、目の前に映ったものは暗黒街で、周囲を見渡しても砂煙で判然とせず、物影も人影も見定める事ができない暗闇に佇んだ状態だった。

漸次意識も回復し、ふと自分の体に触れると吃驚仰天、爆風のために粉々に砕かれた硝子の破片が、あたかも砂のように皮膚にくいこみ、左腕につけてあったはずの腕時計は無く、その輪郭を型どった傷痕が生々しく血跡となってえぐられている。恐る恐る私は頭に手を当てて見ると、髪の毛の乱れは勿論、血が出て凝血したのだろう、ゴワゴワになっているではないか。一体全体何が起こったのだろうか！

すぐに近所に、数百万トンの爆弾でも投下されたのだろうかと推測が突然恐怖に変わった。「やられたな、しかし生き残った」と直感した。とにもかくにも一刻も早くここを抜け出して下宿まで帰らねばならない。

無我夢中でどの道をどうやって歩いたか、家を探して歩いている途中、数人ものもがき苦しんでいる瀕死の被害者を蹴とばし、踏み越えて歩いた。

道すがら悲惨な人々の姿に直面した。片手をもぎ取られ家族の名前を呼びながら、焼け爛れた顔をさらし反狂乱になっている人。夢遊病者のように放心して、呆然と立ちすくんでいる人。子供を背負い、衣服はちぎれ、髪は焼けただれ路上に伏している主婦。真赤にはれた眼球は突出し、血にまみれ、怒鳴りながらスクラム組んで馳ける高校生。だれ一人として、何の原因でこのようになったか知らない。またそんな事を考えている余裕など持ち合わせていない。

私は病院勤務のため白衣を着て常に救急袋を着用していた。汚れ煮しめかえった白衣姿の私に、数人もの怪我人が跪き泣きすがり救護処置を乞うのだった。我を忘れ、自分の痛みも忘れて、袋の中から繃帯やマーキュロを取り出した。少なくとも医学を学んだ意識で、義を見てせざるは勇なきなり、と張り切ってはみたものの、私の所持している医薬品では、余りにも怪我人の傷が大き過ぎて、一人を施療するにも満たないほどの薬で、ほとんど何の役にも立たなかった。

正に生地獄絵巻そのものであって何であろう。この残酷さと悲惨な現状をとうてい書き表す事は私には不可能だし、表現する言葉を知らない。

周囲にあったはずのビルは吹き飛ばされ、まるで荒れ果てた町に、わが下宿先を見つけた。既に家は崩壊し、ただぽつねんと傾いた一本の柱に目をそそいだ。「先生、日見峠に登って来て下さい。生存を祈る。両国」と書き記されていた。

両国と言うのは、その昔、長崎県出身の力士で関脇両国関のことである。私の学生時代、東京で知り合った方で、彼は長崎市外の日見峠の上に住んでいた。

台所あたりであろう所に米びつが横倒れ、生米がはみ出している。土台石の上に、みじめな自分の腰を置いて放心状態のまま、再度柱を眺め読み返していると、ただとめどなく流れ出る涙をどうする事も出来なかった。一体、どういう意味の涙だっ

たのだろうか？

暫くして気を持ち直し、寝ぐらを求めるために日見峠に向かって歩き出した。昼夜の区別もつかない。今、何時頃なのだろうか、時間的感覚もうすれたまま、ふと涙に濡れた瞳を空にそそいだ時、幾万の星がキラキラ輝き、その光が反影して、こんな大惨事とまるで反対に、夏祭りの夜空を思わせる様相であった。

＊

「おくん日」で有名な諏訪神社を曲がると中川町近くに伊良林小学校がある。この校庭には数百人の遺体が次々と運ばれ、木材を焼いて荼毘に付しているらしい。この辺まで来た時、異様な臭気が鼻をつく。真夏の気温なので腐敗が激しく、それはそれは例えようのない臭だった。これが死臭というのだろうか、夜風と共に行けども行けども運ばれてくる。鳥肌が立つようなこの臭覚も、やがて麻痺されてしまって、嫌らしさも、不快感も、すっかり忘れ去られていた。

やっと訪ねて、元関脇、力士両国関の家についた、生きて間見えた再会の感激に抱き合って喜びを分かち合ってくれた。与えられた歓迎の食物は、畠から掘り起こしたばかりのふかした馬鈴薯だった。久し振りに口にしたこのイモの美味しさ、今でいう山海の珍味以上に私を満足させてくれた貴重な糧であった。この時代は少しの食物も入手が困難で、ましてこの戦時中の食糧事情というものは、現今では想像すらつかない宝石的価値であった。

何日ぐらい世話になっていたか忘れたが、何か少しでもこの家の手助けをしなくては、と思って覚えたのがワラジ草履作りだった。一日一日とこの家にも被爆した親類の人が救いを求めて訪れて来た。私は他人でありながら何時までも厄介になっている気まずさと、この家の保存されている食糧も日毎に減少し予想外に苦しくなって行くのが目に見えた。そして苦情もそれとなく感じられてきたので、このまま甘えてはいられないと、市内に下宿していた時の友人の両親の疎開先に避難する決心をした。一升ぐらい入る水筒をもらって、水で飢えを忍んで三〇キロ余も離れた喜々津村を目指しての強行軍が始まったのだ。

生き抜くためには、私の受けた体の傷も、放射能を浴びた体も、癒している余裕などなく、目的地まで歩き続けねばならなかった。不思議な事にこの頃になると、淋しくも悲しくも感じない。これは一体どういう現象なのか今考えてみても分からない。

喜々津村に向かって県道を歩いている途中、米軍偵察機が独特のうなりを立てて、一機頭上に現れた。私は素早く雑木林へ逃げ込み避難した。音の遠のくのを確かめてから歩道に歩み戻ると、数十枚のチラシが空から舞い降ちてくるではないか。ふと一枚を手にして読むと、日本活字で印刷されたチラシのビラ

だった。「日本国民の皆さん、投下したのは新型の原子爆弾です。去る三日に広島にも同様の爆弾を投下しました。皆さんがいくら抵抗しても無駄です。一日も早く神聖なる無条件降伏をするように天皇裕仁に祈願なさい。」という文面であった。私はこのビラを読んで初めて威力あるいわゆる原子爆弾という事を知った訳だ。私は直感的にこれはデマ宣伝だ、こんな事にくじけてたまるものかと、反発しながらも一沫の不安をかくせなかったのは事実だ。道すがら幾つかの光景に遭遇した。小浜方面より肉親の安否を気づかって探しに出かける人。人力車やリヤカーで、肉が腐り人間の形をとどめない半焼きの遺体を運ぶ人、遺体を木箱につめて故郷に持ち帰る者。大八車で瀕死の怪我人を乗せて家路をたどる一組、二組、血だらけの病人を怪我人を並べて運ぶボロボロのトラック。後で聞いた話では、この車の中で息絶えた人の多い事を知らされた。見るも聞くも総てが生地獄の絵巻そのもので惨状を書き表す事ができない悲惨そのものであった。

夕方近くになって疎開先にたどり着いた。すでにここでは叔父さんに当たる人が被爆し避難しここに逃げて来て病床についていた。ここでは農家で六畳の一室を借り受けていた。私を含めてこの狭い部屋は大人五名の住居となった。叔父さんは奥さんと二人の子供の消息を気にしながらも、城山は爆心地に近くここの住民は一人として生き残った者はいない。彼は徴用で三菱の軍需工場に通勤していたため、火傷を受けただけでこの喜々津村に必死で逃げて来たという事だ。彼は唇の一部と臀部(尻)にわずかな火傷を負ったのみで、大した事はないと私共は看病に当たったのだが、日増しにその火傷部が腐敗してきて、蠅を追い払う仕事だけでも、つきっきりでいてやらねばならなかった。数日後、私共の看護の甲斐もなく叔父さんは逝去した。さあ大変、ともかく棺桶もない。近くの製材所へ行き、お願いして、杉木の皮のついた製材屑を買いうけて来て、皆で釘を打ちつけて組立て、自家製の棺桶が出来上がった。最初に私が死人を仮定してその中に正座してサイズを確かめて作ったのだが、いざ遺体を納棺してみると大分余分が出て大変滑稽な棺桶となってしまった。それから皆でリヤカーに積み、山に持って行き、一昼夜薪を炊いて火葬した。

この翌日だったと記憶しているが、ラジオでは重大なニュースとして天皇の終戦の詔勅が放送されたとか。ともかく交通機関は絶え、もちろん新聞などのニュースを知る事も出来ない状況であった。この頃から私は無性に故郷新潟が恋しくなり、一刻も早く私の生存を母親に知らせねばならぬ望郷の念にかられた。しかしその手段はない。帰りたくとも乗物もなく、いろいろの流言飛語が流れてくるばかりだ。米軍がちかぢか下関に上陸するとか、女は髪を切り落とし男装しなければならないとか、それはそれは生き残っている者にとっては呪わしい噂や風評だ

けがこの頃の話題だった。

ある日、突然ある人が、諫早（いさはや）という駅から折り返しで国鉄が動き始めた、というニュースを持って来た。私はもういても立ってもおられぬ衝動にかられた。どんな事をしてでも行ける所までその汽車にぶらさがってでも帰ろうと覚悟を決めた。もう少し様子をみた上でと、随分引き止められたが、私の決心は固くそんな言葉を聞く耳は既に持ち合わせていなかった。

夜の明けるのを待って、私はそそくさと一大決心を実行に移した。予想していた通り、金もなければ切符も持たない人たちの群れが、諫早のプラットホームを埋めつくしていた。ちょうどこの頃、大村方面の軍隊がぼつぼつ除隊となって、軍隊毛布を背負った帰郷軍人の姿もちらほら混じって、ここから発車する列車に乗らんかなと、殺人的にひしめき集結していた。私は車両の接続部よりもぐり込んだ。缶詰列車なんて生易しい言葉で表現するには物足りない。汗と泥にまみれ、まるで汚物の集積所にも似た列車の一員となることに成功した。こんな時は恥辱心だの、人間愛だのという言葉の一かけらもない。猛獣同然の姿であったろうと、今思い起こしても寒気を覚える。この中には被爆者も何人か乗車していた。乗員の中には下痢を起こす者、狂人になる者、呼吸困難を訴えて苦しみ出す者、種々多様な表情が入り乱れている。通路となる所は糞尿の山、その上に人間が重なり合って走る列車に必死ですがりついているのだ。

列車の中で死んで行く者は、次に停車するプラットホームに周囲の人が放り出す。またある者は停車すると、我先にと、素早く窓から飛び出して水をあさってくる。殺伐（さつばつ）とした車内の空気が長く続いた。やがて汽車が広島に通りかかった時、窓外から見える景色は、破壊された無残な家屋、一面は焼野原、牛や馬の死骸が当時のままに放置され、見るも哀（あわれ）、残酷な光景そのものであった。長崎で私はこの目で見たのと同じ地獄絵巻を、私は再び見せつけられた。いいしれぬ悲哀と意味のわからぬ憤りがこみ上げて来て、ふるえる自分を静止するのに精一杯な一時をどうする事も出来なかった。

やがて列車は京都止まりとかで全員下車させられ、東西南北に散った。私はまず空腹を満たすべく、構内の洗面所へ走り、無我夢中で水道の蛇口に口を当てて、息をつく暇もなく水を飲みこんだ。ふと顔をもち上げて、目の前の鏡に自分の顔が写った時、南洋から飛び出して来た人のような自分を見出して吹き出してしまった。笑いを取り戻したのは、あれ以来おそらく初めてで、何年振りかのような愉快な気持ちになった。そしてその鏡の前で、何回となく百面相をして笑いこけてみた。

ともかくここまで来れば、あとは北陸線にのりこめば、すぐ越後、わがふる里なのだという明るい希望と、充分な水での満腹感が安堵（あんど）となって、気分的にも余裕がもてた。鏡に写った真黒な顔は、幾らぬぐっても煤煙（ばいえん）は落ちず、頬はこけ、真白な歯

がうす気味悪く、目の玉だけが大きく輝いて、男とも女ともつかぬ滑稽な容姿に、再び私は鏡に微笑みを投げかけた。この夜はどの列車が何時に出るかわからないので、度胸を決めて、プラットホームの白線を枕に、あたかも浮浪者の如く、人目はばからず悠然とコンクリートの上で夢路をたどった。

＊

北陸を通る列車に乗り込んだのは、多分夜明け前だったと思う。汽車は福井駅を通過した。ふと座席の向側を見ると、家族連れの親子が美味しそうにおにぎりを食べているではないか。さもしいと思いとどまるが、自然と羨ましさで私の視線は知らずの内にその親子連れの方を凝視してしまう。米の魅力に私の咽喉は幾度となく生唾を繰り返し飲み込んだ。またこの時ほど、人間が食物に対して、あさましいほどの執着のある事を知らされた事はない。しかしこの光景の印象は、とてもなごやかで美しく私には映った。何かほのぼのとした温かさを感じさせてくれた。この数日間の私をささえてくれたものは、帰りたい一心と、若さと、水であったといえる。

命がけで目的が果たせた。故郷高田駅に着いたのは真夜中だった。疲れ切っているはずの足も軽やかに我が家へと急ぐ。「ただいま」と大きな声をかけて玄関に立つなり、こんな大きな声が出るほどのエネルギーが、未だ私の体内にあったのかと、自分ながら驚いた。家族の喜びは一通りではなかった。死んだ人間が現れたような錯覚に幾度も疑いの目で私を虜にした。家に着くと同時に私はあれもこれも語らねばと思いながら、蓄積されていた疲労が一度に出て、今までの気力がすっかり失われてしまった。白衣をまとっていたために奇跡が起こったのか原因はわからないが、衰弱と下痢がひどく、それからの私の闘病生活が始まった。死線をのり越えた大きな試練の一幕がここで下ろされたのである。